

る。そしてある場合には、それが牧水文学の致命傷となり得る場合だつてある。いかにも彼の作品を読んで、そこに

牧水の名にふさわしいものであつたと云える。そして又そこにこそ、今なお我々の心を魅せずにはおかない牧水文学の永遠の若さと、ロマンチックな、しかし強靱な何ものかが秘められているのであろう。

以上、牧水の人間性、あるいは彼の芸術観について小さな論証をこころみただけであるが、結局、牧水を論ずると孤独と寂寥の歌人と云う事が云えるであらう。それは又浪漫主義文学者の一般的特質であるとも云えるのである。

或時は我と我が情熱に酔い、又或時は自嘲の苦き涙に寂寥の遺憾なさを酒に逃れてみても、結局、何かを求め、何かを懂れていなければならぬ孤独な詩人である事に変わりなかつた。酒も旅も恋も、所詮、魂の刹那的な避難所ではあり得ても、安らかな安住の場所ではあり得なかつた。しかしなお強いて云うならば、彼を育て、彼が常に小羊のようにそこへ帰つて行つた自然のみが、彼を温かくつつむ、わずかな安息所であり得たのかも知れない。

しかし又云える事は、孤独と寂寥とは人間存在の宿命であるとする前に

われ歌を歌えり今日も故わかぬかなしみどもにうち追われつつ

と感情に引きずられるのが詩人牧水の、そして又人間牧水の真の姿でもあつた。

彼の生涯は、生活上でも、又芸術の上に於いても彷徨と

學問や理屈を抜きにした、裸のままの生命で、目々の存するものにぶつかつて行つた彼の態度は、やはり短歌信者

動揺の絶えざる繰り返しであつた。その繰り返しの中でお、「寂しさのない国」を求めてさまよふのが浪漫詩人牧水の真実の姿であつた。

又そこにあの香り高い牧水文学の抒情の花も咲き得たと思われるのであるが――。

古今和歌集における本歌取考

内田千佐子

古今集の歌には万葉集との類似歌が多く見られる。その一例である、

題しらず

よみ人しらず

昨日こそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく(巻四、秋上、一七二)

は、時の推移のはやさに驚いた心を詠んだものであるが、「昨日こそ……しか」という語法は万葉集中に次の四例を見出すことができる。

昨日社公者在然不思爾浜松之於雲棚引(卷三、四四四)

昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾來

(卷十、一八四三)

昨日社敷奈底婆勢之可伊佐魚取比治奇乃奈太乎今日見都
流香母 （卷十七、三八九三）

島山乎射往廻流河副乃丘辺道從昨日己曾吾越來牡鹿一夜
耳 （卷九、一七五一）

このような発想法は、古今東西を問わず誰でも感じること
であり、現在でも尙、例えば「螢の光」の歌のように生き
ており、影響関係を認めなくてもよさそうではあるが、古
今和歌六帖には小野小町の歌として

昨日こそ妹はありしか思はずに浜松が枝に

雲の鍵く

があり、また万葉集の一八四三「昨日こそ年ははてしか」
の歌は赤人の歌として古今和歌六帖、赤人集及び拾遺集に
収められているので、もとより古今集の歌は上掲の万葉歌
からヒントを得ているということを否定することは出来ま
い。

古今集の歌人達が、万葉集の口誦され、或は民謡として
流伝していた歌を参考とし作歌していたであろうという考
えは、佐竹昭広氏の御説によつて一層強められるものであ
る。佐竹昭広氏は「萬葉集本文批評の一方法」の中におい
て、

澤瀉久孝博士が、萬葉集卷三、二六八

吾が背子が古家の里の飛鳥こよ千鳥鳥

くなり鳴待不得而

の「嶋」を「孀」（の草體）からの誤りと断定してをら
れることから、同じく卷六、九五二

から衣きならの里の嶋待に玉をし附け

むよき人もがも

の「嶋」も「孀」の誤りであるといはれてをられる。
それは

古今集、伊勢物語に有名な

から衣きつゝなれにしつましあれば遙

々来ぬる旅をしぞ思ふ

こそ本作を典拠として為されたものではないかと思つ
てゐる。「から衣」「着なる」「つま」といふことの
三拍子揃つた附合せは、萬葉集以後正にこの歌を初出
とすることは重視されて好い。恐らく、作者在原業平
は「か、き、つ、は、た」の折句歌の制作に萬葉の右
の作を応用したのであらうとかう考へるならば、現行
萬葉集の「嶋待」が王朝初期には未だ「つままつ」と
いふ正しい形で流伝してゐたといふ文献的徴証は依然
として確かめられるのである。（「萬葉」才四号）
と説明しておられる。

このように在原業平が折句歌という技巧を用いるにあつ
て万葉集を応用していることから、古今集の歌人達が例
えば乎詞とするため古歌の詞を採つたり、ヒントと尋を

澤瀉久孝博士が、萬葉集卷三、二六八

吾が背子が古家の里の飛鳥には千鳥鳴

りして見ると見られる歌を示すことが出来る。

題しらず よみ人しらず

ほととぎすなくやさつきのおやめぐさあや

めもしらぬこひもする哉（卷十一、恋一、四六九）

は、万葉集の卷十八、四一〇一と四一一六の長歌に見える

：保登等芸須伎奈久五月能安夜女具休……

を応用していると考えられる。また

題しらず ともりのり

我こひをしるのびかねてはあしひききの山橋の

色にいでぬべし（卷十三、恋三、六六八）

は万葉集の卷四、六六九

足引之山橋乃色舟出与語言繼而相事毛将有

と、同じく卷十一、二七六七

足引之山橋之色出而吾恋南雄人目難為名

を応用していると見られる。同じ例である、

題しらず 読人しらず

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花の

色にいでなん（卷十一、恋一、四九六）

は万葉集の卷十一、一九九三

外耳見筒恋幸紅乃末探花乃色不出友

との関係が考えられる。「あしひききのやまたちばなのいろ

にいで」という語句の使用例は万葉集中にこの二首だけ

ある。次の歌、

このように有原業平が折句歌という技巧を用いるにあつて万葉集を応用していることから、古今集の歌人達が例えば序詞とするために古歌の詞を取つたり、ヒントを得た

題しらず よみ人しらず

今さらにとふべき人もおもほへずやへむぐ

らしてかどさせりてへ（卷十八、雜下、九七五）

の「やへむぐら」は、万葉集の卷十一に二例しかない

念人将来論如者八重六倉覆庭爾沫布益乎

（卷十一、二八二四）

玉敷有家毛何将為八重六倉覆小屋毛妹与居者

（卷十一、二八二五）

を引いているのではないかと思う。つまり古今集の歌はこの万葉歌を本にして出来た歌であると思うのである。

さて、万葉集と古今集との類似歌を二、三見て来たので

あるが、これ等を「本歌取」と見ることはできないであら

うか。本歌取は新古今時代に隆盛し栄えたのであるが、新

古今集の本歌取とは「恋の歌を季節にとりなしたり、或は

秋の季の歌を春の歌にとり用ゐたりなどして、その本歌を

背景に感ずることによつて、一首のうちに二重の情趣美を

醸成しようとするところにその妙味がある。」（註一）の

であり、「古歌の言葉、独立した部としてとるのではな

く、全体の中の部分としてとり、古歌の言葉を、事から

としてとるのではなくて、気分として、即ち特定の気分を

持った言葉としてとる。」（註二）のである。故に、本歌

取の濫觴は古今集から万葉集にまで遡り得るといわれなが

今集における本歌取の立場から古今集の本歌取を見ているからである。古今集と新古今集との本歌取の取り方は違っているのであつて、各々異つた立場から見るべきであると思ふ。新古今集における本歌取は「一首のうち本歌の風情の連想せられて、一層その情趣を複雑化する。」(註Ⅲ)ものであるが、古今集においてはまだそまでの發展はなく、大体本歌の語句を一句乃至三句取りながら同じ心を詠んでゐるといえる。そして語句の取り方には、本歌の語句をそのまま上二句、或は下二句と取つたり、また次の如き初句と結句をそのまま取るなど技巧的な意識を働かせているように見える。

いし山にまうでける時、をと山のもみちをみてよめる づらゆき

秋風の吹きにし日よりをと山みねのこず
ゑも色づきにけり (巻五、秋下、二五六)
あきかぜのふきにけり いろづきのをみこのはもいろづきにけり
秋風之日異吹者水荃能岡之木葉毛色付爾家里

(万葉集卷十、二一九三)

このような取り方は友則、よみ人しらずの歌にも見ることが出来る。次は下二句を取つたものである。

わがやどの池の藤なみさきにけり山郭かい
つかきなかむ (巻三、夏、一三五)

わがやどのいけのふぢなみさきにけりやまのくわい
つかきなかむ
朝霞棚引野辺足檜木乃山霍公鳥何時来將鳴

次は上二句を取つたものである。
よみ人しらず

ゆふされば衣手さむしみよしののよしの
山にみゆきふるらし (巻六、冬、三一七)

ゆふさればいすてさむしみよしののよしの
やまにみゆきふるらし
暮去者衣袖寒之高松之山木每雪曾零有

(万葉集卷十、二三一九)

次は二句と三句目を一致させて取つてゐるものである。

よみ人しらず

風ふけばおきつしらなみたつた山よはにや
君がひとりこゆらん (巻十八、雑下、九九四)
かぜふけばおきつしらなみたつたやまよはにや
きみがひとりこゆらん
海底奥津白波立田山何時鹿越奈武妹之当見武

(万葉集卷二、八三)

次に例示する歌は、語句に本歌の意を含めて取つてゐるのである。

よみ人しらず

山の井のあさき心もおもはぬをかげばかり
のみ人のみゆらん (巻十五、恋五、七六四)
やまのいれのあさきこころおもはぬをかげばかり
のみひとのみゆらん
安積香山影副所見山井之浅心乎吾念莫因

(万葉集卷十六、三八〇七)

この万葉集の歌は、貫之が古今集の序文に引用し、彼自身もこれを本歌にして詠んでゐるのである。序文によるとこの歌は当時、手習をする人の最初に書いた歌でもあつたら

わがやどの池の藤なみさきにけり日朝を

つかきなかむ (巻三、夏、一三五)

朝霞欄引野辺足榎木乃山雀公鳥何時來將鳴

しく、当時の人々に膾炙されていた事は明らかで、本歌になつている点は否定出来ない。次は句法を取つて物をかえているものである。

はるのうたとてよめる よしみねのむねさだ

花の色は霞にこめてみせずともかをだにぬ

すめ春の山かぜ (巻二、春下、九一)

この本歌は

むめの花にゆきのふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりてみえずともかをだに

にほへ人のしるべく (巻六、冬、三三五)

である。同じ例

題しらず よみ人しらず

月夜よしよよしと人につげやらばこてふに

にたりまたずしもあらず (巻十四、恋四、六九二)

我屋戸之梅咲有跡告遣者来云似有散去十方吉

(万葉集卷六、一〇一一)

ところで古今集には次のような本歌取の歌もみられる。

題しらず 読人しらず

もうちどりさへづる春は物ごとにあらたま

れども我ぞふりゆく (巻一、春上、二八)

寒過暖来者年月者雖新有人者旧去

この二首をよくくらべてみると、万葉集の歌は上三句が概念的ないいかたであるのに対して、古今集の方は感覚的であり、下二句の詞を取りながら「人は」を「我ぞ」と主観的に身近なものにしており、全体的に本歌よりは繊細になされている。古今集の本歌取の歌が、本歌から一句乃至三句の詞を取ると共に、本歌と同じ心を詠む傾向にあつたのは、古今集の歌風が「万葉集の直截素朴な歌風から、概して理智的な趣向をこらして、感動を間接的に表現する。」(註Ⅳ)ようになつたために、万葉集の素朴な表現に更に技巧を加え、複雑、繊細、優美など古今風に発展させることができるのであり、万葉集の歌を根拠としてそれを新風に詠みかえることを試みていたとも考えられるのである。

ところで古今集卷五、秋歌下、三一〇には古歌と「そのおなじ心をよめりける」という歌がある。

寛平御時ふるきうたてまつれとおほせられけ
ば、たつだがはもみぢばなるといふうたをかき
て、そのおなじ心をよめりける おきかぜ

み山よりおちくる水の色みてぞ秋はかぎり

と思ひしりぬる

で、詞書にいう歌は同じく卷五、二八四

題しらず よみ人しらず

たつた川もみぢばながる神なびの

みむろの山に時雨ふるらし

である。この発想は万葉集卷十の二二一〇と二一八五に見

ることが出来る。

明日香河黄葉流葛木山之木葉者今之散疑

大坂乎吾越来者二上爾黄葉流志具礼琴乍

そして「その同じ心を」ということについて西下経一博士は

二八四の歌は龍田川、紅葉、時雨によつて秋のはてることを読んでいるに對し、これは龍田山といわないで

「み山」といい、紅葉ば流るといわないで「水の色」

といひ、時雨のことはいわないで「秋は限りと思ひしりぬる」としてゐる。小異はあるが、同じ心である。

歌い方から見ても、二八四の歌は叙景に終始してゐるが、これは「水の色」という風に象徴的表現を用いてゐる。(註V)

と説明しておられる。この一首によつても古今集の歌人達が古歌を根拠として、当時の歌風になつた詠み方をしてゐたといえるのではないかと思う。

以上古今集の本歌取は、万葉集などの口誦、流伝の古歌からたゞ語句を取るにすぎなかつた手法から、本歌の意を含めて取る手法にまで進んでゐる。このような試みが散文

で次才に發展し、新古今集の如き傾向を示すようになったと思われるのであり、その意識の發展段階を古今集の物名部において示すことが出来ると思ふのである。

物名は古今集から始まつた体であるといわれているが、本歌取が新古今集時代になつて突然發達したのではないよゝうに、物名も古今集時代になつてはじめて始つたものではないと考えられる。古今集の物名歌は全体で約六十一首あり、四十八首が撰者時代の歌であるから、物名の歌は撰者時代になつて開花したといえるのであつて、その濫觴を万葉集に見出すことが出来る。

万葉集の卷十六には、才二期の歌人長忌寸意吉麻呂の歌八首と、才三期の歌人達の、それ〴〵數種の物を詠み込んだ歌が載せられてゐる。次はその一連の歌である。

長忌寸意吉麻呂歌八首

三六四 刺名倍爾湯和可世子等櫛津乃檜橋從來許武狐爾安平

佐武

右一首伝云。一時衆集宴飲也。於時夜漏三更所

聞二狐声一。爾乃衆諸誘三奥麿一曰。関二此饌具雜器

狐声河橋等物一但作二歌者。即応二声作二此歌一也。

詠三行騰蔓菁食薦屋梁一歌

三六五 食薦蔓菁菁煮將來梁爾行騰懸而思此公

詠三荷葉一歌

はらすははかくこそあるものおきまらがいなるものはらすものは

大に、言を耳にすきなかつた手注から、本歌の意を
含めて取る手法にまで進んでいる。このような試みが散文
全盛時代を経ると共に、本歌取を承認する層の如何によつ

有之

詠二雙六頭一調

三三七 一二之目身不有五六三四佐倍有来雙六乃佐淑

詠二香塔廁尿耐奴一歌

三六六 香塗流塔爾莫依川隅乃尿耐腹痛有女奴

詠二酢醬蒜鯛水葱一歌

三六二 醬酢爾蒜都伎合而鯛鱸吾爾勿所見水葱乃煮物

詠二玉掃鎌天木香棗一歌

三六三 玉掃刈来鎌麻呂室乃樹与棗本可吉將掃為

詠二白鷺啄木飛一歌

三六三 池神力士舞可母白鷺乃梓啄持而飛渡良武

忌部首詠二數種物一歌一首 名忘失也

三六三 枳棘原刈除曾氣倉將立尿遠麻礼櫛造乃自

境部王詠二數種物一歌 穗積親王之子也

三六三 虎爾乘古屋乎越而青淵爾鮫龍取將來劍刀毛我

作主未詳歌一首

三六四 成棗寸三二粟嗣延田葛乃後毛將相跡葵花咲

高宮王詠二數種物一歌二首

三五五 芑莢爾延於保登礼流屎葛絕事無官將為

三五六 婆羅門乃作有流小田乎喫烏臉腫而幡幢爾居

以上の最初にある「さしなべに」という歌の左註は、「あ

三五五 食薦敷蔓菁煮將來梁爾行騰懸而息此公

詠二荷葉一歌

三五六 蓮葉者如是許曾物意吉麻呂之家在物者宇毛乃草爾

る時人々が集つて宴会をしていた。その時夜が更けて狐の
声が聞えたので、人々が意吉麻呂を誘つて、食器や狐の声
や河橋などに関する歌を作れといつたら、その註文に依じ
てすぐ作つたのがこの歌だということである。三八二六
と三八三一の歌を除いて、三八二七は「雙六頭」を詠み込
んで行つたものであり、他もそれ／＼に物の名前を詠み込
んでいる。三八二六の「荷葉を詠んだ歌」は「蓮の葉はこ
うあるものです。お宅のに較べたら自分の家のは草では
なく、芋の葉でありますよ。」と歌つている。しかしこれ
はたゞ単に蓮の葉のことを詠んだのではなく、中国で詩を
美人の形容に用いたりしたように、意吉麻呂も妻の例えと
して詠んでいる。蓮の葉を詠むに当つて即座に妻のことを
詠み込んだのであろう。他人の妻を美人として賞美し、蓮
に例えた手法はまさに満座の拍手喝采を恣にしたことは想
像に余りあるものである。また一座の人々も何が飛出るか
大きな期待を以つて固唾をのんだことであらう。ここに物
名歌が他の歌と異つた味があるのであつて、即妙の機智を
楽しみ数種の物の名を詠み込みながら、如何によく意味の
通る歌にするかに力が注がれたのである。たとえ芸術的価
値は低くとも作歌技巧の遊戯歌として面白く、一面機智を
弄する古今歌人達が、物名の歌として面づく、一面機智を
受継がない筈はないと考えられる。古今集の物名というの
は、

かみやかはむらびとつらゆき
むばたまのわがくろかみやかはるらん

かぢみのかげにふれるしらゆき

という具合に与えられた題の名前を懸詞式に詠み込んでいく方法である。万葉集では宴席という場所柄、用いることも甚だ下品な傾向を示しているが、古今集では与えられている題の殆んどが植物の名前で三六首あり、地名が九首と生物が五首詠まれており、視覚的にも感覺的にも平安朝の趣向に合った優雅な物となつてゐる。

ところで懸詞は、万葉集にも見られる技巧であるが、物に古今集時代になつて急速な発達を示してこの発展が「物名」という部立を生じさせるに至つたものであるとみられている。しかし、古今集の物名部には

わらび 真せい法し

煙たちもゆともみえぬ草のはを

たれかわらびとなづけそめけん

という歌があり、「わらび」と「わら火」をかけてはいるが詠み方が物名の歌らしくない。そこで物名の歌というのは、懸詞の発達と万葉集における物の名を詠み込んだ歌との融合ではないかとも考えられる。上掲の万葉歌三三三四は、食用植物の名前を多く詠み込みながら、下旬「はふくずの後もあはむとあふひ花咲く」のところを「懸け詞によつて後も逢うことを期する意を寓してゐる（註Ⅵ）のであ

つて、作者未詳の歌であるところから歌い伝えられていたと思われる。そしてこの歌は古今集の

あふひ かつら よみ人しらず

人めゆへのちにあふ日のはるけくは

わがつらきにや思ひなされん

を想起させるものである。万葉集では一首に物の名を五つ六つも詠み込んでいるために、鑑賞に堪えるものは少ないが、古今集では多くとも四つの名前を詠み込む程度で大体与えられた題は一つであり、また物の名を懸詞式に詠み込んでいくために、物名の歌としてではなく普通の歌としても鑑賞に堪えるものが多く詠まれてゐる。物名歌は八代集では古今集以下拾遺集と千載集に収められてゐるのみで、千載集の頃には隠題ともいわれてゐる。

物名歌は、万葉時代には宴会題詠歌として出された数種の物の名を、一首の中に次々と詠み出しながら意味の通つたものにして行く、機智的な即妙を味わうものとして芽ばえていた。和歌は万葉時代にあつては、社会的、国家的の席に勢力を占めていたが、漢詩文の隆盛によつてその位置を奪われ、個人的位置へ転落し、その結果、古今集では万葉集の素朴性、男性的から繊弱、女性的に、また即興的、機智的な歌風へ変化したといわれている（註Ⅶ）。機智を弄する面のあつた古今集の歌人達は、懸詞の巧みな使用の発展に半つて、単に与えられた物の名を詠み込んで行く歌か

つて後も逢うことを期する意を寓している」(註Ⅵ)のであ

ら、或は単に一語に二義をかけて詠むことから、更に古今風の優雅な知的な遊戯として、かけことば式に物の名を詠み込む技巧へと意識するようになって行き、物名という歌に花を咲かせたと考えられるのである。

註Ⅰ 小島吉雄博士「新古今集の研究統篇」

註Ⅱ 山路平四郎氏「本歌どりについて」(国文学研究

才十五輯)

註Ⅲ 註Ⅰに同じ。

註Ⅳ 資料日本文学史

註Ⅴ 西下経一博士「古今和歌集新解」

註Ⅵ 武田祐吉博士「増訂萬葉集全註釈」十一

註Ⅶ 谷鼎氏「古今和歌集評解」

展に伴つて、単に与えられた物の名を詠んでいくのではなく

鼻 一 筋

サラブレッド四才馬の王座を決める日本ダービーを、この春テレビで見た。姿のいい競争馬がさつそうと走る有様は、誠に素晴らしい。四、五番手にあつた一番人気のハクシヨウが、ゴール二百米ぐらいで然トツブに立ち、あわや優勝かと思われたが、余り人気もなかつたメジロオーが、突然大外から物すごい追いかみをかけ、ゴールでは抜いたかと思われた。ついに写真判定。その結果、メジロオーの追いかみはならず、やはりハクシヨウの優勝となり、七百万円の賞金を勝ち得たわけであるが、その差はわずか鼻一筋、ゴールがいま一米伸びておれば、

撃をうけているのに、一方はほとんどかえりみる者もない。勝負の世界の酷しさは恐ろしいほどである。

プロ野球も、去年はセの大洋が万年どん尻から一躍優勝、日本シリーズでも連勝してしまつたのだから驚く。三原監督の手腕は大いに賞賛されたものである。がその大洋が今年はまだどん尻に落ちそうである。

相撲も秋場所が終つて大鵬は柏戸と共に横綱となり、二十一才の青年横綱登場というわけであるが、その反面、若の花の凋落は無敵をほこつていただけに淋しい限りである。しかしこれもまた止むを得ない。

だから勝負事は嫌いだという人がある。けれど好きと嫌いとは、わらず、どうやら世の中は勝負の連続であるらしい。

方は日本一の名を欲しいままにし、はなやかに写真機の一斉射

本 田 義 彦